

二〇二六年度 一般選抜 学力検査(国語)

現代の国語、言語文化
(古文・漢文を除く)

解答番号

1

〜

28

一 次の文章を読んで後の問い（問1～問9）に答えなさい。

わたしたちは、未来のことを考えることは当たり前だと思っている。将来にまったく思いを馳せることのない人間などいるのだろうか。また、わたしたちは、時間は直線的、単線的で均質的なものだとも思っている。わたしたちの経済の基本、限られた時間内でより多くを生産する、スキマ時間を有効活用するといった効率性は、そのような時間の感覚を前提としている。ただ実感としての時間は、同じではない。漫画や友人とのおしゃべりに夢中になっているときには時間はあつという間に過ぎていき、退屈な講義を聞いているときには時間は遅々として進まない。過去―現在―未来の区別も、一分一秒という時間の単位も、もともとはわたしたち人間が生活や社会、経済を動かしていくために便宜的に生み出した概念である。だが、わたしたちはいつの間にか便宜的に生み出された時間の概念に生活や社会、経済のリズムを合わせ、人間の生存を時間によって規定するようになった。⁽¹⁾そのような時間に規定されない暮らしとは、どのようなものだろうか。

アマゾンの狩猟採集民ピダハンの時間的世界と、タンザニアの農耕民の時間的世界について紹介し、Living for Today と時間との関係を考えたい。^(注1)

ダニエル・L・エヴェレットが『ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観』（二〇一二年）で描いた暮らしは、おそらく現存する人類社会において究極のLiving for Todayである。⁽²⁾

エヴェレットは、一九七七年、アメリカの福音派教会から派遣された伝道師として、狩猟採集民ピダハンにキリスト教を布教するためにアマゾンの奥地に赴く。その後、彼は、ブラジルのサンパウロ州立カンピナス大学の大学院言語学コースに入学し、いずれ聖書をピダハン語に翻訳する心づもりで、言語学的調査のために再度アマゾンの奥地に入る。エヴェレットはそれから足かけ三〇年あまりもピダハンと生活を共にすることになるのだが、ピダハンとの暮らしはやがて彼に信仰を捨て、無神論者になることを決意させる。

同書が開示したピダハンの世界は、驚くべきものだ。アマゾンの先住民には豊かな物質文化があることが報告されているが、ピダハンには芸術作品どころか、道具類もほとんどつくりたくない。物を加工することがあっても、長くもたせる手間はかけない。肉の塩漬けや燻製といった保存食もつくりえず、食べられるときには食べつくし、ときには何日も食べない。彼らは英語版の著書のタイトルである「寝るな、ヘビがいる」の言葉どおり熟睡しない代わりに、いつでもどこでも転寝をする。人類学者が好んで調査してきた、儀礼らしき行為も存在しない。葬式や結婚式、通過儀礼もない。創世神話も口頭伝承もない。曾祖父やいとこの概念も存在しない。それどころか彼らの言語には、ありがとうやこんにちはなどの「交感的言語」も、右左の概念も、数の概念も色の名前もないのである。

当初、エヴェレットは、このようなピダハンの文化を残念に思ったらしい。A、彼の言語学的調査は、このような「動物」にすらみえる彼らの文化を理解する、一つの重要な切り口を導き出す。それが、直接体験の原則である。

「ジョジュツ的ピダハン言語の発話には、発話の時点に直結し、発話者自身、ないし発話者と同時期に生存してきた第三者によつて直に体験された事柄に関する断言のみが含まれる」。

ピダハンの言語には、過去や未来を示す時制がきわめて限定的にしか存在しない。さらに、彼らが「リカージョン」(再帰性…文のある構成要素を同種の構成要素に入れ込む力)を持たないことは、ノーム・チョムスキー以来の言語学を根底から揺るがす大論争を引き起こした。I わたしたちは、「わたしは、「友だちが『あの店のラーメンはおいしかった』とみんなが言っていた」と話すのを聞いた」といったかたちで、一つの構文のなかに何重にも「」を入れ込んで、「あの店のラーメンがおいしかった」とする内容を拡張していくことができる。チョムスキーの生成文法では、この再帰性を特徴づける文法能力をあらゆる人間に備わっている普遍的な能力だとしてきたが、ピダハン語にはこの入れ子状の文がなかったのだ。

直接体験の原則は、ピダハンがなぜその場限りの道具しかつくりなかつたり、食料を保存しなかつたり、創世神話や口頭伝承がなかつたり、血縁関係に曾祖父が含まれないのかをうまく説明した。B ピダハンは、実際に見たり体験したりしたこと

のない事柄——わたしたちが「過去」や「未来」と位置づける事象や伝説・空想の世界——に言及しないし、そもそも関心を示さないのだ。

Ⅱ また、価値や情報を行動や言葉を通じて「生のかたち」で伝えようとするピダハンは、価値を、数や色の名前のような抽象的、記号的なもの、普遍化のための概念に置き換えることをしない。

Ⅲ たとえば、ある場面では、右は「川の水が流れてくる場所」で、左は「水が流れていく場所」かもしれないし、「大きな木がある方向」と「小さな木がある方向」かもしれない。新芽から濃く色づいた葉っぱがある時点で「緑」と呼ぶのは、「緑」という概念が先にあるからであり、そのような概念がなければ、「色が変化していく葉っぱ」でしかないのである。

それゆえエヴェレットは、キリスト教の布教に成功しなかった。キリスト教の聖書もコーランもヴェーダも、直接体験の原則に⁽¹⁾ツラなされたピダハンの信念を少しも揺るがせることができない。

Ⅳ それはまた、外部の民族や社会との接触がなかったわけではない。ピダハンは、なぜ現在まで独自の世界を維持してきたのかも——すべてではないにしろ——説明する。

過去や未来を語らないことは、過去や未来、抽象的な概念を持たないこととイコールではないが、ピダハンのほとんどの関心が「現在」に向けられており、それゆえ彼らが「現在」をあるがままに生きていることは興味ぶかい。彼らは直接体験したくない他の文化に興味がなく、自分たちの文化と生き方こそが最高だと思っており、それ以外の価値観と同化することに関心がない。

Ⅴ 未来に思い悩むわたしたちに比べて、何やら自信と余裕がある。彼らは他人に貸しをつくらないし、他人に負い目を感じることもない。彼らにとつて一日一日を生き抜くために必要なのは、直接体験に基づく自身の「力」だけである。

ピダハンはやや極端な例ではあるが、彼らの文化の主な特徴——乏しい物質文化、その場で消費しつくす傾向性、貯蓄や技術的な発展に対する無関心など——は、世界各地の狩猟採集民の民族誌を紐解けば、それほど珍しいものでもない。⁽⁴⁾ 現在を生きることは、富の蓄積や財の扱いに対する特有の態度とも深く関係している。そして、こうした態度は、研究者により、ヒトの進化和平等主義をめぐる問いと深く関連づけられてケントウ⁽⁵⁾ウ⁽⁶⁾されてきた。

人類学の古典的名著である『石器時代の経済学』（一九八四年）においてマーシャル・サーリンスは、「狩猟採集民は食糧の獲得

に必死で、飢えに苦しんでいる」といった伝統的な「未開」社会理解を打ち崩した。彼は、さまざまな資料から、狩猟採集民は絶え間ない労働どころか、農耕民や現代人と比しても労働時間は短く、余暇を楽しみ、欲求の充足された「始原のあふれる社会」に生きていることを提示したのである。サーリンズは、物質的に豊かなはずの世界こそ、ごく一部の人間が富を独占し、多くの人びとが飢えており、文化の進歩につれて相対的にも絶対的にも飢えの量が増大してきた、という逆説を主眼として、次のような結論を導き出す。

「狩猟Ⅱ採集民の生活は、その情況にせまられて、やむなく客観的に低い生活水準にとどまっている。しかし、それが彼らの目標なのであり、**C** 適切な生産手段もあたえられているので、すべての人々の物質的欲求は、ふつうたやすく充足されている」。

狩猟採集という経済実践のほんとうの障害は、労働生産性、すなわち「働かない」ことではなく、必ず直面する収獲（注して、げん）逋減であり、**D** 移動が暮らしに埋め込まれていることにある。移動を常とする狩猟採集民にとって物質的「富」は、文字通り重荷ではない。しかしもつとも未開な人びとは、ものを持たないゆえに貧困ではなく、ものを持たないからこそ貧困ではなかったのだとサーリンズは指摘した。貧困が財の多寡ではなく、一つの社会的ステイタスを意味すると仮定した場合、そもそも「物質的重圧から比較的自由」で「なんの占有欲」もなく「所有意識が未発達」な「非経済人」の彼らのあいだには、貧困は発生しないと。

その後、数多くの人類学者が所有の問題を再考した結果、狩猟採集民は所有意識を持たないのではなく、個人の狩りの技量や捕獲量の差により不平等が発生し、特定個人が威信を持たないようにする実践をおこなっていることが明らかにされていく。ここで重要なことは、未来や過去を前提とした生産主義的な生き方は普遍的なものではなく、またそのような生き方は当事者たちにとって必ずしも「不幸」で「貧しい」ものではないということである。

（小川さやか『その日暮らし』の人類学もう一つの資本主義経済』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

- (注1) Living for Today ——— その日暮らし。その日の収入をその日のうちに使ってしまうような暮らし方。
- (注2) 交感的言語 ——— あいさつなど、話し手と聞き手の間に一体感が生まれるような機能をもつことば。
- (注3) ノーム・チョムスキー ——— アメリカ合衆国の言語学者（1928〜）。
- (注4) 生成文法 ——— チョムスキーの提唱した言語理論で、表現された形の奥に隠されている言語構造を理論的にとらえようとするもの。
- (注5) コーラン ——— イスラム教の聖典。預言者ムハンマドが神から受けた啓示を集約したもの。
- (注6) ヴェーダ ——— 古代のインドで編まれた宗教的な文書。
- (注7) 収穫逓減 ——— 収穫が少しずつ減少すること。

問1 傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
1
2
3

(配点6点)

(ア) ジョジュツ
1

- ① 長年の活動が認められ、ジョクンを受ける。
- ② この家は代々ジョケイの家筋が続いている。
- ③ 年齢に従って、社員にジョレットをつける。
- ④ この会社には技術力がケツジョしている。
- ⑤ 歩行者が多いので、自動車がジョコウしている。

(イ) ツラヌかれ
2

- ① 後輩の失敗にカンヨウな態度を見せる。
- ② 災害時、住民に避難をカンコクする。
- ③ 初志カンテツの精神で困難を乗り越える。
- ④ 雑誌のカントウページを確認する。
- ⑤ 舞台上で盛大なカンセイを浴びる。

(ウ) ケントウ
3

- ① 驚いてソットウしそうになる。
- ② 患者に抗生物質をトウヨする。
- ③ 遺族にアイトウの意を示す。
- ④ 将軍が敵のトウバツを命じる。
- ⑤ 新しい店に客がサットウする。

問2

次の文は本文の一部であるが、文中の **I** ～ **V** のどこに入れるのが最も適當か。次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、**4**。

(配点3点)

彼らはよく笑う、自身に降りかかった不幸を笑う、過酷な運命をたんと受け入れる。

- ① I ② II ③ III ④ IV ⑤ V

問3

空欄 **A** ～ **D** を補うのに最も適當なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、**A 5**、**B 6**、**C 7**、**D 8**。

(配点8点)

- ① しかも ② なぜなら ③ いわんや ④ だが
⑤ それゆえ ⑥ むしろ ⑦ つまり ⑧ なかんずく

問4

傍線部(1)「そのような時間」とあるが、どのような時間か。その説明として**適当でない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、**9**。

(配点5点)

- ① 直線的、単線的で均質的に流れる時間。
- ② わたしたちが日々の生活の中で実感している時間。
- ③ 人間が生活や社会などを動かしていくため、便宜的に生み出した概念としての時間。
- ④ わたしたちがそれによって、人間の生存を規定するようになった時間。
- ⑤ その感覚が、わたしたちの経済の基本である効率性の前提となるような時間。

問5

傍線部②「エヴェレットは、……狩猟採集民ピダハンにキリスト教を布教するためにアマゾンの奥地に赴く」とあるが、エヴェレットのキリスト教布教活動についての筆者の考えとして最も適当と思われるものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、10。

(配点6点)

- ① エヴェレットのキリスト教布教活動は成功せず、かえって彼自身が無神論者になるという結果に終わったが、それは、あるがままの現実を受け入れるピダハンの生き方にエヴェレットが豊かな精神性を見いだしたからである。
- ② エヴェレットのキリスト教布教活動は、創世神話などを持たないピダハンの文化を残念に感じるという彼の西欧中心主義のために成功しなかったが、同じ理由から言語学的調査への取り組みを進めたことには意味があった。
- ③ エヴェレットのキリスト教布教活動は成功しなかったが、その理由は、芸術作品さえ作ることにないピダハンの文化は本質的に即物的なもので、そこには宗教の成立に必要な他者への感謝や興味が存在しなかったことにある。
- ④ エヴェレットのキリスト教布教活動は成功せず、彼自身も無神論者になってしまったが、そのことがきっかけでピダハンの言語学的調査が進み、長く外部と無交渉だった彼らの言語の構造が解明されたことには意味があった。
- ⑤ エヴェレットのキリスト教布教活動が失敗したのは、ピダハンは過去や未来など直接体験したことのない事柄への関心がないため神の国にも関心がなく、また生活に満足しており救いを求めようとしなかったからである。

問6

傍線部③「曾祖父母やいとこの概念も存在しない」とあるが、ピダハンの世界に「曾祖父母やいとこの概念」が「存在しない」のはなぜか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

11。

(配点5点)

- ① ありがとうやこんにちはなどの言語を持たないピダハンは他者への関心が薄く、「曾祖父母やいとこ」など自分が直接会ったことのない人間について考える機会がないから。
- ② ピダハンの文化は直接体験を原則とするため、実際に目の前に存在していなかった「曾祖父母」や、血縁関係が離れた「いとこ」を親族として扱うという習慣がないから。
- ③ 「曾祖父母やいとこ」は、親子、兄弟、姉妹に比べると抽象的な存在であるが、ピダハンはそもそも抽象的な概念を持たない以上、そうした血縁関係にも関心を抱かないから。
- ④ 「曾祖父母やいとこの概念」が存在することの前提として、歴史へのある程度の理解や関心が必要だが、そもそも過去や未来の概念自体を持たないピダハンは歴史に言及しないから。
- ⑤ ピダハンの社会では、今、この場の自分の欲求だけを重視する直接体験の原則が重視されるため、「曾祖父母やいとこ」など自分との関係の薄い血縁関係には関心を示さないから。

問7

傍線部(4)「現在を生きるとは、富の蓄積や財の扱いに対する特有の態度とも深く関係している」とあるが、どうか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。(配点6点)

- ① ほとんどの関心を現在に向けて生きていることが、富を蓄積しようとせず、また、財における不平等を避けようとする態度を成立させたということ。
- ② 現在の生活を維持するための食糧の獲得に必死で余裕がないということが、富の蓄積や財の独占をあきらめてしまうという態度を生み出しているということ。
- ③ 現在の境遇をありのままに受け入れて生きていることが、集団の富を少しでも蓄積し、財を集団内の皆に平等に分けようとする態度に通じるということ。
- ④ 富を蓄積することなく、また、財を平等に分けようとする態度が、過去や未来を思いわずらうことなく現在をありのままに生きることにつながるということ。
- ⑤ 富の蓄積や財の独占を望まないという態度が、現在の生活を維持するための食糧を獲得するだけで精一杯という貧しい生き方をもたらしてしまうということ。

問8

傍線部(5)「貧困ではなかった」とあるが、ここでの「貧困」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選
びなさい。解答番号は、13。

(配点5点)

- ① その社会全体の労働生産性が低い状態であること。
- ② その社会の多くの人々の生活水準が低い状態にあること。
- ③ その社会の多くの人の欲求が充足されていない状態であること。
- ④ その社会の多くの人が占有欲を持たず所有意識も希薄であること。
- ⑤ その社会全体の物質的富が増えない状態が続いていること。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 外部の民族や社会との接触を拒んできたピダハンの文化には、集団内の人々の労働時間が短く、皆が余暇を楽しみ、欲求が充足されるといふ太古の狩猟民文化の特徴が、今も色濃く残っている。
- ② ピダハンをはじめとして、狩猟採集民の生き方は不平等が発生しやすい生産主義的なものであるが、そうした生き方を不幸で貧しいと決めつけてはならず、その精神的な豊かさに着目していく必要がある。
- ③ 狩猟採集民が飢えに苦しんでいるという認識は誤りで、ピダハンを含む多くの狩猟採集民は欲求の充足された社会に暮らしており、だからこそ所有意識を持つこともなく、貯蓄や技術的發展にも無関心なのである。
- ④ ピダハンを含む狩猟採集民の生き方は、未来や過去を前提とした生産主義的特徴を持つ一般的な現代人の生き方とは対照的で、物質的に豊かであるとはいえないが、必ずしも不幸で貧しいものではない。
- ⑤ ピダハンの言語には過去や未来を示す時制が限定的にしか存在しないが、これは再帰性が存在しないという狩猟採集民の言語に共通の特徴から生じた現象で、彼らが貧困を意識しない要因の一つである。

二 次の文章を読んで後の問い(問1～問9)に答えなさい。

都市化と工業化の影響は地球にくまなく及んでいいる。地表だけでなく、大気にも(たとえばオゾンホール)^(注1)、地中にも(たとえば地層に残された放射性物質の痕跡)、人間の活動の証跡が刻まれている。人間は地球で生を営む生物というだけでなく、地球システムに多大な変化をもたらす地質学的脅威となった。そのような新たな時代を、気温が安定し人類の文明が発達した完新世と區別して「人新世」^(シンシセイ)とする提案がなされている。オゾンホールの研究で知られるパウル・クルツェンと生物学者ユージン・ストーマーが二〇〇〇年に提唱して以来、人新世という概念は、自然科学だけでなく人文・社会科学にも波紋を投げ、自然・環境・地球との向き合い方について激しい議論が交わされている。

⁽¹⁾ 人新世の状況に関してエコクリティシズムでよく言及される作品のひとつに、アメリカの環境ライター、エマ・マリス(一九七九年)の『自然』という幻想^(注2)(二〇一一年)がある。「自然はほぼいたるところにある。しかし、どこにあるとしても必ず共通する特徴がある。「手つかずのものはない」ということだ」というマリスの見解は、人の影響が地球に限なく及んだ人新世の状況を踏まえたものだ。手つかずの自然を〈あるべき自然〉とみなし、開発以前の生態系の保護を **A** 目標としている限り、身のまわりの自然に意識が向くことはない。マリスは、手つかずの野生/人の手に入った自然、在来種/侵略種といった二項対立をほぐし、生活環境にある身近な自然を「新しい自然」と再定義した。街路樹や空き地は鳥や昆虫や小動物の棲処^(すゐか)であり、人間社会とは異質な自然の理法に ^(つかさど) 司^(つかさど)られている。こうした「新しい自然」をマリスは、半分野生の「勝手に生い茂っている庭」(rambunctious garden、邦訳では「多自然ガーデン」と名づけ、これからの自然保護は手つかずの自然に戻すことを試みるのではなく、野生化しつつある自然を人間の管理のもとで(その管理には放置という手段も含まれる)未来に向けて育てていくべきだ、という方向性を打ち出した。

手つかずの自然を理想とする先入見にメスを入れ、日常生活の背景でしかなかった自然を前景化したマリスのコウケンは大き

いが、身近な自然の重要性を主張すること自体は特に目新しいことではない。よく知られるところでは、一九九三年、鱗翅類研究者（つまり蝶ちようの研究者）⁽³⁾で作家のロバート・マイケル・パイル（一九四七年―）が「経験の絶滅」というエッセイでマリスタと同じようなことを提唱している。

パイルはエッセイの冒頭で、コロラド州の都市オーロラでの少年時代についてこう語っている。教会の裏手に、宅地造成の影響で水が滲み出てぬかるんだ一画があった。ぬかるみを好むタデに覆われたその場所に蝶が飛来し、パイル少年は夢中になった。やがて、そのぬかるみが舗装されると、タデも蝶も姿を消してしまった。この一連の出来事により自然環境およびその保護を意識するようになったパイルは、身近な自然の重要性についてこう述べている。「多くの人は自分の目で見ることにないウイダネスや野生動物に深い満足感を味わう。しかし、他の生きものに直じかに触れることは実に生き生きとしたシゲキ(1)をもたらし、いかなる追体験もその代用にはならない。生態系危機の最大の原因の一つは、多くの人が暮らしの場にある自然から離れてしまったことにあるのではないか」。

自然環境に関心を寄せるだけでは不十分で、直に自然を経験してはじめて自然の営みが腑ふに落ち、社会生物学者E・O・ウィルソンのいう「バイオフィリア（生命愛）」が育つとパイルは述べる。多くの人にとってそうした経験の場は、空き地や建物裏のぬかるみといった身のまわりの自然であるが、そこは常に開発の波にさらされている。身近な自然がなくなればバイオフィリアは育たず、そうするとさらに開発が進み生態系が破壊される。この悪循環を断つには、種の絶滅を心配するよりもまず「経験の絶滅」を食い止めることが必要だ、というのがパイルの主張である。

⁽⁴⁾日本でも、身近な自然の重要性を語る書き手は少なくない。たとえば、池澤夏樹(注4)は『母なる自然のおっぱい』（一九九二年）で、もともと未知の不安と魅力をたたえた「自然の時間」に支配されていた世界が、それとは別の安全で予測可能な「人為の時間」によって変えられたことの問題について論じている。養老孟司(注5)と宮崎駿(注6)は対談『虫眼とアニ眼』（二〇〇二年）で、昔からいじめはあったが、それが深刻化したのは「人間ごとにししか関心が向かない狭い世界」にいるからだと指摘し、生活圏内の自然と

の接触を通して人間社会を外から眺める視点をもつことの重要性について語っている。

以上のように、生活のなかの自然はかねてより着目されているが、マリスの「新しい自然」論は徹底した未来志向という点で一線を画す。昔は虫や花と過ごし自然の時間に浸ることで人間社会を相対化することができたのに、という見解は、過去の理想化、美化、ノスタルジーにつながるとして忌避されることが少なくない。加えて、人新世に関しては、未曾有の気温上昇、過去に例のない大型ハリケーン、かつてない規模の山火事等々、前例がないということが特徴であり、過去に基準を置くことの是非が問われている。人新世をめぐる議論でマリスの見解が肯定的に受けとられているのは、過去へのまなざしをバツサリ斬り捨てているからであろう。

「われわれは自然を改変し続けてきた。いまそれをホウキ(ウ)して、偶然のなりゆきに任せるわけにはいかない。地球を管理するのは人類の義務なのだ」というマリスの主張は、たとえばツルの大群が羽を休める川の中洲(なかす)が農業・工業用の大量取水により変化してしまったならば、重機でツルの休息場所を作ることが人間の責任だというふうに、**B**を視野に入れている。これは、人間、テクノロジー、地球環境が相互に作用しあう「技術圏(テクニクサークル)」の現実に対応した見方だと言える。

技術圏とは聞き慣れない言葉であるかもしれないが、電気、ガス、上下水道、物流といった生活インフラに支えられ、スマートフォンやパソコンが身体の一部であるような日常に明らかのように、わたしたちは紛れもなく「技術の生態系(テクニクエコシステム)」(大黒)で生を営んでいる。この場合の「技術」がデカルトの時代に端を発する科学技術(テクノロジ)を意味し、古代ギリシャに由来する「技術」でないこと(注8)とは言うまでもない。大黒岳彦(おおいこくたけひこ)の説明によれば、デカルト的技術は、第一段階(デカルトが生きた前後の一七世紀から一八世紀前半)、第二段階(一八世紀後半から一九世紀初頭にかけての産業革命期)を経て、第三段階(一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての第二次産業革命期)において社会生活の成立に不可欠な土台となり、「日常生活における技術の使用は自明化し、更には次第に日常的意識の底に沈殿し、ついには透明化するに至った」。こうした「技術の全面化」が技術圏の根底にある。「技術圏」とは、「技術」「自然」そして「社会」のネットワークであり、名称のままに「技術」のみが突出した技術決定論的状况を指すのでは

ない。「技術」と「自然」そして「社会」は、このネットワークにおいて **C** の関係にあつて、互いを区別しつつも制限のない結びつきをもつことによつて、互いに互いを媒介しあい変容させる関係にある。

人新世における主体は人間でも資本主義社会でもなく、「技術圏内における人間、インフラ、消費形態、経済、エネルギー体制から成る具体的な〈集合体〉」(Horn and Bergthaller) であると指摘されるように、人間は技術圏の一部であつて支配者ではない。現在、人間と環境との関係は技術圏という枠組みを抜きにしては考えられず、これには人工知能との共生も関わるが、さしあたりマリスの「新しい自然」論にみられるような自然観のアップデート(注9)が必要だということを押さえておこう。塵芥処理所(じんがい)を生活の場とする鉄三(注10)にとつてハエがかけがえのない自然であるように、人の心を動かす他種を自然とよぶのならば、自然は技術圏の至るところにある。

自然の営みに接して感覚が活性化するような経験がなければ、自然環境がどうなろうと痛くも痒く(かゆ)もない。そうやって環境破壊は進んできた。環境の危機は想像力の危機であると述べたが、そもそも想像力の危機は経験の衰退と相関関係にある。他種・多種との生き生きとした相互交流の経験は、文学によつて表現を与えられて物語となり、その物語が腑(ふ)に落ちたとき読者の経験となる。むろんそれは追体験だが、読者にとつての契機となつて身近な自然に気づき、じつさに自然に触れ始めるのならば、文学には経験を絶滅から守る力があると言える。そのような文学を発掘し、論じ、共有するエコクリティシズムの役割は決して小さくない。

(結城正美『文学は地球を想像する——エコクリティシズムの挑戦』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

(注1) オゾンホール——成層圏のオゾン層の濃度が、穴が開いたように非常に低くなっている部分。

(注2) エコクリティシズム——文学と自然環境の関係に関する研究。

(注3) ウィルダネス——原生地域。人の手があまり入っていない荒れ地などの自然環境。

(注4) 池澤夏樹——小説家(1945〜)。

(注5) 養老孟司——医師。解剖学者(1937〜)。

(注6) 宮崎駿——アニメ映画監督(1941〜)。

(注7) デカルト——ルネ・デカルト(1596〜1650)。フランス出身の哲学者・数学者。

(注8) 大黒岳彦——哲学、情報社会論の研究者(1961〜)。

(注9) アップデート——コンピュータでファイルを新しいものに置き換えたり、ソフトウェアの一部を更新したりすること。ここでは、考え方を新しいものに置き換えることという意味。

(注10) 鉄三——灰谷健次郎(1934〜2006)の小説『うさぎ兎の眼』の登場人物。小学一年生。塵芥処理所の長屋に祖父と二人で暮らしてハエを飼育することだけを楽しみにしていた。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

15

と

17

(配点6点)

(ア) コウケン

15

- ① 現在祖父はショウコウコウ状態を保っている。
- ② 国民はコウキユウ的な平和を願っている。
- ③ 大国とのチョウコウ貿易で利益を得る。
- ④ 転職先の会社でコウグウされて満足する。
- ⑤ コウジョを受けて所得税が軽減される。

(イ) シゲキ

16

- ① 社会問題解決のためのシサクを講じる。
- ② 課題文を読んでそのロンシをまとめる。
- ③ ショウ末節にとらわれて全体像を見失う。
- ④ 相手に複数のセンタクシを提示する。
- ⑤ 彼の書く文章はフウシがきいている。

(ウ) ホウキ

17

- ① 人生にはいくつものブンキ点がある。
- ② スウキな運命をたどった偉人の伝記を読む。
- ③ 店員はキョウな手つきでスカーフを結んでくれた。
- ④ 選挙でキケンすることには賛成できない。
- ⑤ この事実はキセイの理論では説明できない。

問2 空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①く⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

18

く

20

。

(配点6点)

A

18

- ① 暫定的
- ② 抽象的
- ③ 絶対的
- ④ 建設的
- ⑤ 局所的

B

19

- ① 生態系の破壊に対する人道的対処の理想像
- ② 自然と人間の関係を主観的に見ることの愚かさ
- ③ 生態系の復元に資する科学技術の積極的利用
- ④ 人間が未来に向けて自然を管理することの危うさ
- ⑤ 生態系の回復を目指した誤った対応の可能性

C

20

- ① 一心同体
- ② 不即不離
- ③ 比翼連理
- ④ 以心伝心
- ⑤ 一期一会

問3 傍線部X・Yの文章中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、21・22。

(配点4点)

X メスを入れ

21

- ① 思い切った批判を加え
- ② 細かな修正作業を行い
- ③ 正確な分析をほどこし
- ④ 大きな矛盾を見いだし
- ⑤ 大胆な定義を与え

Y 痛くも痒くもない

22

- ① 少しも損害を被らない
- ② 全く対応できない
- ③ 理解が及ばない
- ④ なんとも感じない
- ⑤ 決断がつかない

問4

傍線部(1)「人新世的状況」とあるが、どのような状況か。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

(配点5点)

- ① 人間の活動の影響が地球の全ての領域に及んでいるという状況。
- ② 人類の文明と手つかずの自然が対立するようになったという状況。
- ③ 人新世という概念が人文・社会科学にも影響を与えているという状況。
- ④ 自然・環境・地球との向き合い方に関する議論が活性化したという状況。
- ⑤ 手つかずの自然を理想的な自然と見なすようになったという状況。

問5

傍線部②「日常生活の背景でしかなかった自然を前景化した」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

24。

(配点6点)

- ① できるだけ原初のままの自然を残そうという努力のもと人の手から遠ざけられていた森林が、その後適切に管理されなくなり、際立った存在として顕在化したこと。
- ② 人間の経済活動によって、その土地では生育していなかった植物が繰り返される日常生活の中で繁殖して、その植物に適した生育環境を作り出そうとしたこと。
- ③ 人間の手が入る前に維持されていた豊かな生態系をもつ自然が、開発などの人間の行為によってそのバランスを崩し、人間生活にも影響を及ぼすようになったこと。
- ④ 道端の雑草も人の手の入っていない自然のように考えられる自然林や保護区と同じように、一つの自然の営みの形として理解すべきであると気づかせたこと。
- ⑤ 人間の身近に存在する他愛のない自然が、有史以来開発されていない手つかずの自然以上に価値のある理想的なものだと人々に知らせたこと。

問6

傍線部③「作家のロバート・マイケル・パイル（一九四七年―）が……マリスと同じようなことを提唱している」とあるが、パイルとマリスの主張に共通しているのは、どのようなことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。

（配点6点）

- ① 自然はあらゆる場所に存在するが、それはすべて人間による開発などによって荒らされた自然でしかないのだから、今後の自然保護活動においては、いったん人の手の入った自然をこれ以上荒らさないようにすることが大切だ。
- ② かつては手つかずの自然に対立するものとして人の手が入った自然が考えられていたが、そうした二項対立による分類を排除し、すべての自然を同じように保護することが、今後の自然保護活動においては重要になる。
- ③ 自然保護活動において重要なのは、手つかずの自然をあるべき自然と考えるのではなく、身のまわりの自然に直接触れて自然の営みに感応しながら自然保護のあり方を考えることである。
- ④ 人間の手による開発などで暮らしの場に存在する身近な自然が消えてしまうと、多くの人がそれらの自然に直接触れることができなくなるが、その結果として現代の生態系の危機が生じている。
- ⑤ かつては、たとえば人の手が入ったものであるとはいえ、人々の暮らしの場に多くの自然が残っていたが、現代ではそうした自然が急速に失われつつあるため、人々はバイオフィリア（生命愛）を失いつつある。

問7

傍線部(4)「日本でも、身近な自然の重要性を語る書き手は少なくない」とあるが、「日本」の「身近な自然の重要性を語る書き手」について、筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

(配点6点)

- ① マリスやパイルと並んで身近な自然に着目している点には共感を抱いているが、マリスやパイルとは違って、昔をなつかしむことで過去を実際以上に美化するノスタルジーにつながってしまった点には不満を持っている。
- ② 身近な自然の重要性に着目している点ではマリスやパイルと同様だが、マリスやパイルがそれを自然環境の保護にか結びつけなかったのに対し、日本の書き手が人間社会に関連させて考えた点は高く評価できると考えている。
- ③ 身近な自然の重要性に着目しているという点ではマリスやパイルと同様だが、その自然についての根本的な考え方が異なっているため、過去の人間社会を相対化することにはかつながっていない点に不満を持ち、強く批判している。
- ④ 身近な自然を人間社会の相対化という論点に結びつけ、新しい自然環境保護の手法を提案した点を高く評価しつつも、徹底した未来志向によって現代の諸問題の解決を目指したマリスやパイルの論には及ばないと考えている。
- ⑤ 身近な自然の重要性に着目した点は高く評価できるが、自然を改変し続けて人新世をもたらした人類の責任と義務を論じるうえでは、そのような過去を振り返ることよりも、マリスのような未来志向が必要だと考えている。

問8

傍線部(5)「自然観のアップデート」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、27。

(配点5点)

- ① 手つかずの自然と人の手の入った自然を対立させる考え方から、両者の融合を理想とする考え方に転換すること。
- ② 人の外部にある自然という考え方から、人と共にあるものとして自然に触れる行動を起こす方向に転換すること。
- ③ 自然に関心を寄せるだけでは不十分であることを知り、意識の方向を自然を経験することの重要性へと転換すること。
- ④ 「種の絶滅」から、身近な自然を経験することがなくなるといって「経験の絶滅」へと、関心の対象を転換すること。
- ⑤ 自然と人間社会は異質だという考え方から、自然は技術を介して人間社会につながるという考え方へ転換すること。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

28

(配点6点)

- ① 技術が社会生活の成立に不可欠な土台となったことにより、人間は人新世の主体としての地位から転落したため、人間以外の生物種が新しい自然として台頭してきた。
- ② 自然保護活動の進展は、人の手が入った自然を「新しい自然」と見なす自然観を生み、さらにはその「新しい自然」と人間との触れ合いを描く文学を生み出すきっかけとなった。
- ③ 自然の営みとの交流の経験を表現した文学は、それを読んだ人がじっさいに自然に触れる契機になり得るため、経験を絶滅から守ること、ひいては自然環境の保護に資する存在である。
- ④ 技術によって自然を改変してきた人間は、技術によって自然を保護していく責任を負っており、その責任を果たすためには、現在透明化しているデカルト的技術を復活させる必要がある。
- ⑤ 実際には存在しない手つかずの自然を回復するという目標を捨て、人の手に入った身近な自然を保護することに力を入れることで、自然と人間社会を技術でつなぐ技術圏の実現を期することができる。